
日本人間関係学会ニュース 第98号 発行日:2020.3.20

News No.98 Japan Association of Human Relations March 20, 2020

発行：日本人間関係学会 広報委員会 E-mail: tanikawa@kusw.ac.jp 関西福祉大学 谷川和昭研究室
事務局：〒799-2496 愛媛県松山市北条 660 聖カタリナ大学人間健康福祉学部 釜野研究室
E-mail : jahrjimukyoku@gmail.com URL : http://jahr.jp/

[内容] ☆大会委員長挨拶 ☆全国大会特集 ☆順子の映画鑑賞記② ☆人間関係学探訪④ ☆日本人間関係学会賞

《大会委員長挨拶》

日本人間関係学会全国大会を終えて

大会委員長 藤川 君江
(日本医療科学大学教授)



第27回全国大会は11月30日～12月1日に、無事終了することができました。当初は10月12日～13日に開催予定で準備を進めていました。しかし、台風19号の影響で直前に全

国大会を中止せざるを得ない状況となりました。2019年度の全国大会が開催できるか不安でしたが、開催校の日本医療科学大学から全国大会の候補日程をいくつか提案して頂き11月30日と12月1日に開催できました。

全国大会の日程が変更になり、発表登録して頂いた数名の方が参加できなくなり、非常に申し訳なく、残念な気持ちでいっぱいです。しかし、全国大会の当日に事前参加して頂いていた会員の方や非会員の方の参加があり、家庭的な雰囲気の良い全国大会が開催できたことに感謝申し上げます。

また、本学のリハビリテーション学科の徳永教授の特別講演や放射線学科の吉本先生、帝京科学大学の福沢先生のミニコンサートに協力して頂き、全国大会を盛り上げて頂いたことをこの場を借りて感謝申し上げます。

私にとって全国大会の大会長は初めての経験でした。そのため、準備が不十分で迷惑をお掛けした会員の方もいたと思いますが、温かく見守って頂いたことで無事に全国大会を終えることができました。全国大会を通して人間関係の大切さを再確認しました。次回の全国大会はアクシデントがなく、無事に遂行できることを願っています。



全国大会特集 2019.11.30-12.1 日本医療科学大学（埼玉毛呂山）

令和最初の日本人間関係学会全国大会。その第 27 回大会は、当初、2019 年 10 月 12-13 日での開催を予定していましたが、台風 19 号による悪天候から中止を余儀なくされました。しかし、2019 年 11 月 30 日と 12 月 1 日に延期して無事に開催の運びとなりました。この両日、大会テーマを「超高齢社会における人間関係とオーラルフレイル」として、埼玉県にある日本医療科学大学を舞台に、あたたかなおもてなしムードが漂っていました。ここではそうした雰囲気をも 2 日間にわたる大会の流れを追って、ドキュメント風に紹介します。

1 日目 2019 年 10 月 12 日、改 2019 年 11 月 30 日に初日延期開催となった日本人間関係学会第 27 回全国大会。

池袋駅から東武東上線に乗り、坂戸駅で乗り換え、川角駅下車。心地よい日差しが包んでくれました。ほどなくして学生スタッフ 3 名の笑顔のガイドにより、無事に会場の日本医療科学大学に到着。



開会前にはなんとモーニングコンサート。ギター片手に吉本絵夢先生による圧巻の演奏と歌声に参加者は聞き入りました。それもそのはず、過去に東京シュガーキャッツというグループを結成されて、CD デビューも果たされています。開会前の素敵な演出でした。



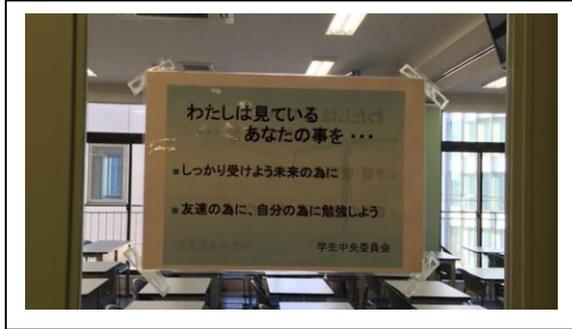
そして待ちに待った開会となり、山本克司理事長のユーモアあふれる挨拶に続き、藤川君江先生による大会長講演。テーマは「一人暮らし男性高齢者から見てきた人間関係とオーラルフレイル」。離島の男性高齢者との 10 年来の交流をもとに、人間関係模様と健康維持の大切さに言及されました。

続く特別講演では会場校の作業療法士でもある徳永千尋先生による「手から手へのコミュニケーション」の題で、希望の光が見えてくるような内容のお話をいただきました。

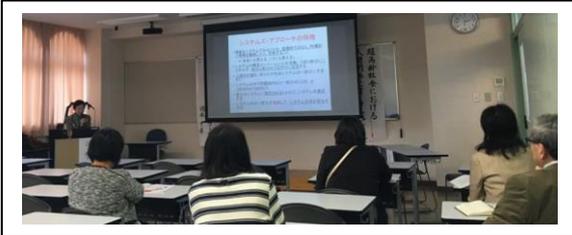


お昼休憩に入ると、今度はランチタイムコンサート。本格的な衣装に身をまとった帝京科学大学非常勤講師の福沢節子先生による素敵なソプラノ。最後の締めは「浜辺の歌」の歌詞が全員に配布され、一緒に歌い上げました。





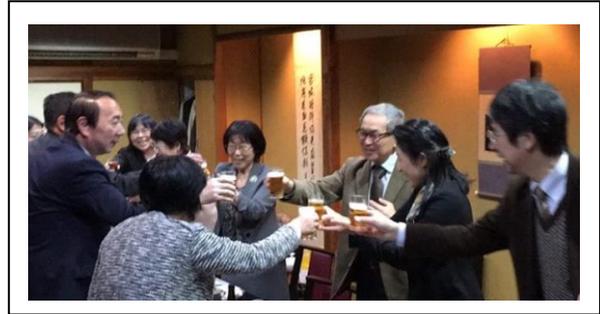
「未来のために勉強しよう」という貼り紙を横目に、午後最初のプログラムは基調講演「アディクションと人間関係」。講師は横浜市立大学の松下年子先生でアディクション研究実践の第一人者的存在と目されている方でした。困っている人にみんなで取り組むことが重要であることの示唆を与えてくださいました。



続いては、研究・実践発表（第一部）2 題。座長は関西福祉大学の谷川和昭先生。開始当初、パソコントラブルで開始できない魔の時間帯を巧みなスピーチで急場をしのぎました。また、質疑応答では会場の笑みを誘いました。そして、研究・実勢発表（第二部）2 題。座長は昨年度の大会長でもある東北医科薬科大学の小島良一先生。冒頭スピーチで一気にアカデミックな雰囲気が高まり、質疑応答も白熱したものとなりました。

以上、研究・実践発表では台風延期等による演者の発表辞退もありましたが盛会のうちに終了することができました。

初日プログラムの完了後は、由緒正しい和食のお店に場所を移し、乾杯。この日の盛りだくさんのプログラムの振り返り等に花を咲かせました。その後、送迎バスにて坂戸駅へ。初日解散となり、翌二日目会場での再会を約束しました。



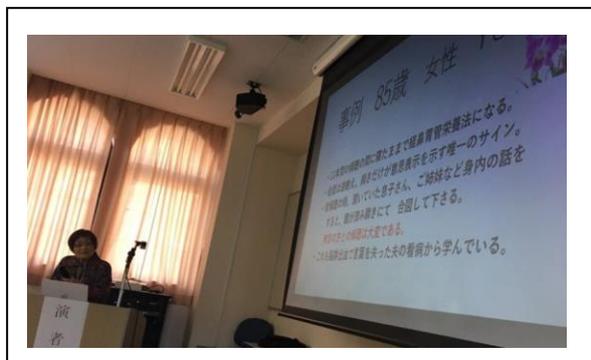
2 日目 2019 年 10 月 13 日、改 12 月 1 日、日本人間関係学会第 27 回全国大会の 2 日目、最終日。今朝も学生スタッフの温かな出迎え、ガイドにより会場となる日本医療科学大学へ川角駅から徒歩で足を運びました。近辺には城西大学、明海大学、東京国際大学などがあり、プラカードをもって待っていてくれたことは本当にありがたかったです。玄関で目にした「報恩感謝」の言葉が胸に染みしました。



午前中は研究・実践発表（第三部）。当初、6 つの演題発表の予定でしたが、大会延期の影響もあり、2 題の発表となりました。座長も初日に続き関西福祉大学の谷川和昭先生と東北医科薬科大学の小島良一先生の両氏が登板されることとなりました。

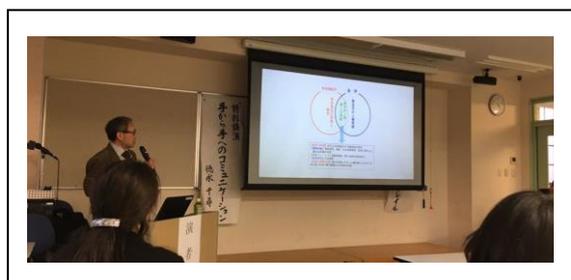
こうしたスクランブルな対応ではありましたが、特筆すべきことが 2 点ありました。1 点目は、御年 89 歳の鈴木好子会員が自らの実践発表をおこなったことです。終始マイクを離さず立ったまま発表と質疑応答をこなされました。鈴木会員は学会参加も発表も初めてとのことでしたが、流暢な語り口で「人間には無

限の可能性があると、70歳を過ぎてからパソコンを始めたことも紹介されていました。89歳での学会発表は他に例がないのではないのでしょうか。このことは、本学会ならではのエピソードとして、きっと、今後も関係者の間で語り継がれることに間違いのないでしょう。



2点目は、理事長、研究委員長による神業的対応があったことです。大会中止・延期に伴う発表辞退者が出たことはエントリー者の当初の予定もあり致し方ないことです。しかし、これによる穴埋めとして、研究委員長の占部慎一先生によるアクティブラーニングの展開がありミニグループ討議と発表に続くコメント、さらに理事長の山本克司先生による初日研究発表の再演とその続編の報告がなされたことは、会場内も大いに湧きました。

山本理事長、占部研究委員長の双方に共通するキーワードは強いていえば“家族”でした。時代の流れにしたがい変容する家族。これからの人間関係として家族関係を改めて見つめ直すことが大切であることが示唆されました。



また、研究・実践発表は、大会執行部が便宜を図り、午後に1演題が追加されました。この座長には日本社会事業大学の森千佐子先生が包容力のある進行ならびにコメントをされ無事に幕を閉じました。

また、この間、場所を1階の玄関に移り、毎年初日に行ってきた集合記念撮影を、今回は二日目の昼食前におこないました。その後、ランチコンサートが再び、吉本絵夢先生によるギター弾き語りで参加者の多くが魅入りました。生演奏では藤川大会長のリクエストにより「キセキ」などのナンバーも登場し、参加者は耳を傾けました。

なお、吉本先生のオリジナルソング「北風のロマンス」を今大会のテーマソングにできないかとの声がフロアから上がり、決定の運びとなりました。このことについては理事長承認、大会長了解、吉本先生承諾がトントンと進み、後日、大会の様様をメモリアルスライドショーに作成する際にバックミュージックとして採用することとなりました。学会に対して音声使用について許可いただいた吉本先生に改めて御礼申し上げます。

(スライドショー動画については、本会公式Facebookページから誰でもご覧いただけます)



午後のプログラムでは、自主シンポジウム「国家を支えるアクティブシニア」、佐々木美恵先生を講師とする論文講座「原著論文の作成方法：量的研究」が実施されました。論文講座はこれからの若手研究者に大事な取り組みといえます。初めてのプログラムでもあり、丁寧にご対応くださった佐々木先生に感謝します。

末尾となりましたが、今大会は10月台風による延期開催となり、このひと月半、大会執行部も学会執行部も本当に例年よりも苦勞が多かったように感じられます。そうしたなかで、大会にご参加くださった皆様、本当にありがとうございました。そして、改めてどこの誰よりも責任を感じ役割を遂行してくださった大会長の藤川君江先生とスタッフの皆様へ学会員・参加者一同、感謝をしてお礼を申し上げたいと思います。

よく訊かれるのが、観る映画をどのようにして選ぶのですか、ということです。

まずは、シリーズものはよく観ます。現在までに続編があるものとして、アメコミ関連のXマン、キャプテンアメリカなど。スターウォーズ、ミッションインポッシブル、ワイルドスピード、007、オーシャンズなどは必ず観ています。巔頂の俳優と監督の作品も選ぶポイントが高くなります。

また、評判になった作品、アカデミー賞やカンヌ映画祭、ベルリン映画祭などの受賞作品も観賞しています。

今回は二本の映画をご紹介します。

『存在のない子供たち』レバノン映画

この映画はカンヌ映画祭で、審査員賞を受賞した作品です。レバノンの女性監督が手掛けています。

主人公は12歳の少年。貧しさの中で生まれ育った少年は、市場の使いっぱしりで家族の食い扶持を稼いで生きています。妹は12歳で鶏と交換され嫁がされ、すぐに亡くなってしまいます。

そんなこともあってか少年は家を出て、1歳児のいるシングルマザーの下で、ぎりぎりな生活を送ることになります。母親が不法滞在で拘束され帰れなくなっても、この1歳児の面倒を見続け、綱渡り的な毎日を過ごしていくのです。12歳の少年が、より弱い1歳の子供を見捨てないことに、胸が痛みます。この乳児とのやり取りがあまりにも自然で絶妙でした。

出演俳優はすべて無名、素人とのことです。

少年が実際にシリア難民だったことで、芯に迫ってくるものがありました。怒りと悲しみと絶望感に。

この絶望的な環境において、自分を生んだ罪で両親を「世話ができないなら生むな」と訴えて、物語は終わりとなります。

レバノンの貧困家庭の子供たちのすべてが、出生届も出さず、学校へも行けないのかはわかりませんが、このような状況を生み出す社会や大人たちに、少年が警鐘を鳴らしたのだと思います。

『風をつかまえた少年』マラウイ・英国合作映画

アフリカのマラウイ。そんな国があることさえ知りませんでした。やはり貧しさゆえに学校に行けなかった少年が風力発電を作り、村を救ったという実話です。

自転車の部品を使い風車を作り、水を引き干ばつの被害をなくそうとした14歳の少年。

向上心や勉強心があるのに、貧しさゆえに学校に行かすことができないという親の立場や苦悩も描かれており、その葛藤も十分に伝わってきます。

父親の唯一の財産でもある自転車を壊して風車の部品を作るシーンは感動的です。

私にとって映画を観ることは、疑問や矛盾を問い直し、見つめ直すためのものと言えるのかも知りません。私自身が社会を、現実を変えることができるとは思っておりませんが、知らなかったことを知るきっかけを与えてくれるのはいつも映画なのです。

人間関係学探訪シリーズ⑭

日本人間関係学会は教育・医療・心理・福祉など研究者だけの集まりでなく、人間関係に関心のある企業人、学生、市民など多種多様な会員が集まっています。そうした会員のお一人おひとりにスポットを当てて、Q&A形式で、その実践やお人柄、人間関係への想いを語っていただき、人間関係学の探究に何らかの示唆を得ることが本シリーズの意図・ねらいです。シリーズ第14回では、本学会の学会誌編集委員長を務める田中康雄先生に語っていただきました。



田中 康雄氏

浦和大学 総合福祉学部総合福祉学科 准教授

大学では社会福祉士養成に関わり、研究分野は高齢者施設職員のストレスマネジメントと人材育成。日本人間関係学会では、広報誌編集委員長を経て、現在、学会誌編集委員長を務める。

研究以外で重要視していることは、一期一会の人との出会い、体重管理。

谷川（広報委員会）：こんにちは、田中康雄先生。

今日はよろしくお願いいたします。

田中：お疲れ様です。こちらこそよろしくお願いいたします。

谷川：田中先生と初めてお会いしたのは、別の学会で、8年前の金沢大学で開催された日本福祉図書文献学会だったと思います。社会福祉教育についてセンセーショナルな素敵な発表でした。

田中：時が経つのは早いですね。近年、社会福祉学を学びたい生徒が減少しており、社会福祉士養成教育の危機を感じ、大学教員として自身の研究分野以外に、社会福祉学の学問としての魅力を情報発信する必要性を痛感しています。このような背景をもとに発表させていただきました。

谷川：当時、文献学会では、研究発表と研究実践報告の2つに加えて自由文献報告という発表区分が追加になったばかりで、非常に反響も大きかったのが先生のご発表でしたね。それでは田中先生のご経歴から教えてください。

田中：私が社会福祉学に関して師事したのは、高齢者福祉の大家であり、関西学院大学名誉教授で、西宮市民文化賞を受賞された浅野仁先生です。研究は研究のための研究ではなく、実践現場に還元できる研究をすることの重要性等、大学教員として有るべき姿を教えてくださいました。

谷川：著名な研究者でしたね。とくに学ばれたところはいかがですか？

田中：調査研究後に、結果をどのようにして的確な言葉に変え、他者が見てもわかりやすく伝え、

実践現場に還元できる研究成果につなげるかななどの多くの視点を学ばせていただきました。

谷川：浅野先生とえば、私は学生時代に『高齢者福祉の実証的研究』（川島書店、1992）を私自身の研究の参考にもさせていただいておりました。懐かしい感じがいたします。次に、話は変わりますが、ご趣味についてはいかがですか。

田中：仕事です、ワーカホリックかもしれませんが（笑）。厳密に言いますと、調査研究を通して、全国津々浦々を訪問することです。もともと旅行が好きなおもありますが、その地域に行き、その土地に触れ、地域住民の方々と交流することが、すごく楽しく、そして大きな学びにつながっています。今年も全国の様々な高齢者施設にインタビュー調査に行きました。それらの調査地は、例えば中部地方では、岡崎女子短期大学の仲田勝美先生のご紹介など、日本人間関係学会でのご縁を機に、北海道から沖縄まで調査地を拡大することができました。もう一つの趣味は、高校時代の体型と体重を維持するために、体重管理を徹底することです。食事制限とカロリー計算の戦略と加齢との戦いは、今では生きがいの一つになっています。ただ、我ながら、かなり変であるとの自覚はありますので、ご心配には及びません。学生には、“ガリガリ”と呼ばれることもありますが、ひたすら58kgにこだわって生きています。

谷川：ガリガリですか（笑）、スマートと言ってもらいたいですね。それにしましても、ストイックなところを私はほんの何十分のいくつかでも

見習いたいものです。いずれにしても、全国さまざまな施設等にチェックインされ、調査も段々と深められていきますね。では、学会に入会してどのくらいになりますでしょうか。

田中：約8年になります。

谷川：入会のきっかけは何だったのでしょうか？

田中：現在、聖カタリナ大学にいらっしゃる釜野鉄平先生に紹介していただきました。

谷川：釜野先生でしたか。文献学会でもお世話になっていますが、本会の東海・関西地区会研究会でも、何度かご一緒する機会がありましたね。では入会されて、良かったなと思うことは？

田中：社会福祉学の先生方だけでなく、保育、教育、心理学、看護学など、他分野の先生方と知り合うことができ、以降仲良くさせていただいることが本当にありがたく、自分の財産です。

谷川：いろんなバックボーンをもつ方々が集うところは財産ですね。最も印象に残った大会は？

田中：永野典詞先生のいらっしゃる熊本県の九州ルーテル学院大学での全国大会です。九州ルーテルの皆様から、おもてなしを受けたことが今でも鮮明に記憶に残っています。また、祖父母のお墓が熊本県にあり、全国大会を機会に久しぶりにお参りができたことも、何とも考え深く感じました。

谷川：熊本大会も素晴らしかったですね。プライベートも大切されて…。今のお仕事についていかがいますが、とくに研究面はいかがでしょうか。

田中：介護老人福祉施設における施設タイプ別の人材育成システムの開発に向けて、毎年全国調査を行ってきました。機縁法ではなく、無作為抽出法による全国調査の実施のため、肯定的あるいは否定的な様々な反響があります。そのため、各実践現場にご協力いただいた貴重な調査データは、何とか自身の集大成として論文にまとめた後、書籍化したいと考えています。また、毎年、複数本は論文としてまとめることを目標に取り組んでいます。まだまだ、勉強中の身ですが、学会誌編集委員会の仕事を通して、様々な会員の皆様の研究論文から、多くの示唆を得ることができ、この機会は本当にありがたいです。また、領域を超えた様々な学問領域から学べるのが、日本人間関係学会の良さの一つだと感じています。

谷川：非常に精力的に活発に取り組まれていて、他者にはなかなかできないことと思います。

田中：そう言っていただき、嬉しい限りです。

谷川：ところで、本学会では2003年に本邦初で

人間関係力という概念が発信されました。いろいろな捉え方がございますけれども、先生の、人間関係力について思うところはいかがでしょうか。

田中：一人でできることは有限です。しかし、人とつながることにより、自分自身の可能性も無限になると感じています。大学教員としても、研究者としても、私自身の力はちっぽけですが、学会の皆様や同僚の先生方、学生のみんなとの人間関係により支えていただき、現在がある気がします。現在（いま）を大切にし、また来る明日に向かって日々全力投球していくためにも、日頃の人間関係に感謝し、いつ何時も、他者に対する気遣いと思いやりを忘れず過ごしていきたいと思います。

谷川：なるほど。つながり、支え合い、いまを大切にする力という感じでしょうか。では、最後にもう1つ。とくにうちの学会は人間関係の和が大切ですが、もっとこうすれば良くなるかもしれないという何か提言なり提案はございませんか。

田中：自身の調査において、高齢者施設では関わる人が多ければ多いほど職業性ストレスが高まる傾向が示唆されました。人間関係は複雑です。しかし、人間関係を良くすることは意外にシンプルなロジックです。会員の皆様同士が交流を深め、自分自身と同じぐらい互いを思いやることにより、人間関係が良好になり、日々の生活が楽しくなり、みんながより幸せに近づけることができるのではと考えています。全国大会は年1回ですが、それ以外に、定期的にインターネット等を通して交流し、会員全員の顔が見える学会になればうれしいです。それらに向けて、早坂三郎理事長のもと、お互い協力し合い、助け合える学会に少しでも貢献していきたいと思います。最後に、インタビューすることはあっても、されることはあまりありません。今回のインタビューを通して、何だか嬉しい気持ちになってきました。前向きなことを考えると気力が湧いてくるのかもしれない。

谷川先生、今回の人間関係学探訪シリーズの機会をいただき、ありがとうございました。皆さんも、谷川先生のインタビューを受けてみませんか？きっと素敵な気持ちになると思います。

谷川：自分を大切にすくらいに相手を大切にすること。相手を大切にできなければ自分も大切にできない、ということなのでしょうね。田中先生、今日は貴重なお話をお聞かせいただき本当にどうもありがとうございました。

（インタビュー：2020年1月25日）

日本人間関係学会賞

本学会には、今まで最優秀研究・実践発表賞以外に賞がありませんでした。このため会員の方のご努力に応える賞を新たに創設できないか、第27回大会委員長の藤川君江先生と一緒に検討いたしました。結果、過去10年間に主たる発表者として5回以上研究・実践発表をされた会員の方に、日本人間関係学会賞を授与することを提案し、了承されました。今後、益々多くの方が研鑽を積まれ、優秀な研究・実践をされることを期待しております。

研究委員会委員長 占部慎一

2019年度受賞者（敬称略、退会者を除く）

- ・ 占部慎一
- ・ 谷川和昭 関西福祉大学
- ・ 仲田勝美 岡崎女子短期大学
- ・ 藤川君江 日本医療科学大学

新理事長からのごあいさつ

日本人間関係学会 理事長

早坂 三郎

今年も早や年の瀬となりましたが、会員の皆様には益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

いつも本学会に対しご理解とご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。

扱て、今年度の日本医療科学大学における第27回全国大会総会から1週間後の12月8日の臨時総会に先立って開催された常任理事会・理事会にて私が理事長に選考され、これを受けての臨時総会にて承認され、同日、理事長に就任致しましたことを、茲に、ご報告申し上げます。

つきましては、本学会創設者の茨木俊夫先生の学会設立の理念のもと、これまで学会が積み重ねてきた基盤の上に、研究と交流の場を会員の皆さんと共に構築して更に積み重ね、併せて社会貢献を図ると共に世の負託にも応えてまいりたいと存じますので、何卒、旧に倍しますご支援とご協力を偏に願ひ上げます。

しかし、このご報告まで日数を要してしまい、会員の皆様にはご不安とご心配をお掛けしましたことを深くお詫び致します。ただ加えて申し訳ありませんが、急な交代となり全てが従前のように十分に機能するためには、今暫くお時間を頂戴したいと存じます。体制づくりを丁寧に仕上げてまいりたいと存じますので申し訳ありませんが、ご賢察ください。

後日、改めまして、詳細をご報告方々説明させて頂きたいと考えております。

末筆ながら、お健やかに清々しき初春をお迎えください。

令和元年12月18日

（編集後記）

今回は全国大会特集に多くのページを割きました。おそらく初の中止・延期開催となった今回の第27回全国大会では、山本理事長（当時）、杉山事務局長（当時）、藤川大会長には特にお世話になり感謝申し上げます。そして、実行委員会の先生方、学生さんスタッフ、参加者の皆さんには本当に救われました。またいつか再会できるようなことがあれば、嬉しく思います。学会は新しいステージが始まろうとしております。（谷川和昭）